

報告番号 甲 乙 第 号

田中 あや君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：「名前の正しさ」と名指しの本性的正しさ
——プラトン『クラテュロス』研究——

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授 同大学院文学研究科委員	納富 信留
副査	慶應義塾大学文学部教授 同大学院文学研究科委員	上枝 美典
副査	京都大学大学院文学研究科教授	中畑 正志
学識確認	慶應義塾大学文学部教授 同大学院文学研究科委員	納富 信留

2016年1月16日に公開で論文審査会を開催し、本論文の内容について議論を行った。

論文の構成

田中あや君による学位請求論文は、古代ギリシアの哲学者プラトンの対話篇『クラテュロス』を主題とし、その難解な議論を統一的な見通しで解釈しようとする意欲的な論考である。「名前の正しさ」をめぐる言語に関する哲学史上最初の論考を、対話の文脈から丁寧に読み解き、現代の言語哲学との関係を論じている。全体の章立てと構成は以下のとおりである（章と節のみ）。

序論

第一章 『クラテュロス』読解への道標

- 1 問題の所在
- 2 『クラテュロス』の背景にある事情
- 3 語源分析
- 4 クラテュロスと「名前の正しさ」
- 5 『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題

第二章 名指しの本性的正しさとプラトンの言語論

- 1 はじめに

- 2 ヘルモゲネス—われわれ—の視点
- 3 プロタゴラス批判
- 4 名指しの本性的正しさ
- 5 「名前の形相」
- 第三章 「名前の正しさ」についてのソクラテスの解釈
 - 1 はじめに
 - 2 名前についてのホメロスの考え
 - 3 派生的名前の語源分析
 - 4 名前を構成する字母と対象との間の音声的類似性
- 第四章 「名前の正しさ」の意味論的問題
 - 1 「割り当ての議論」
 - 2 「二人のクラテュロスの議論」・
 - 3 「σκληρότης」の議論
- 第五章 「名前の正しさ」の存在論的問題
 - 1 意味論的問題から存在論的問題への転換
 - 2 「記述的意味＝知識説」
 - 3 名前の不調和をめぐる議論
 - 4 実在を学ぶ二つの方法
 - 5 学びをめぐる議論の結論
- 第六章 流転説
 - 1 プラトンと流転説をめぐる問題
 - 2 「流転をめぐる議論」

本論文は、プラトン対話篇『クラテュロス』の冒頭から末尾にわたる全体を統一的に読み解きながら、現代に通用する言語哲学の意義を明らかにしようとする。そこでは、登場人物クラテュロスが語る「名前の正しさ」が含意する問題をソクラテスが批判的に吟味するという読み筋を作業仮設として立て、この対話篇が「語と対象」の関係をめぐる一つの完結した議論を構成することが論じられる。序論では、この議論の基本方針と問題が提起され、各章の議論の大筋と結論が予め示される。

第一章は議論の前提として、当篇を適切に理解するための予備的考察を行う。従来十分な注意が払われてこなかった冒頭部の再検討、これまで中心として注目されてきた「語源分析」の位置づけ、クラテュロスという人物と「名前の正しさ」の関係、そして、プラトン哲学の発展上の位置づけという諸問題が扱われる。この予備考察をつうじて、従来の『ク

ラテュロス』研究において共有されてきた基本構図の問題点が指摘され、その全面的見直しははかられる。

第二章は、従来の研究で「言語本性主義」を擁護する議論と見做されてきた部分(384c10-391b6)を別の仕方でも読み直す。そこで対話相手ヘルモゲネスは、言語について独自の立場を提示しているのではなく、日常の名前使用者の常識、つまり私たちが勝手に名前を付けることができるという素朴な見方を代弁するに過ぎない。この新たな位置づけから、プロタゴラス相対主義との峻別、「名前」という道具の機能、「名前の形相」という関連論点が丁寧に論じられる。この議論を通じて、語と対象の二項関係ではなく、語、語を使用する主体の知のあり方、対象という三項関係で考察されるべきとの見通しが示唆される。

第三章は、本対話篇の中心部というべき語源分析(391b7-427e5)を取り上げ、この議論を作業仮設に沿って読み解く試みがなされる。これはクラテュロス自身の言論論ではなく、クラテュロスにとって「名前の正しさ」とは何であるかをソクラテスが解釈する過程であるという読み筋が提案される。まず、語源分析にあたっては、プロタゴラスやプロディコスらソフィストに代わって「ホメロスら詩人」が権威とされ、神々を始めとする名前についての彼らの見方が吟味される様子が分析される。名前の意味論的説明において、音声的要素の機能が「名前の力」という概念で説明され、一連の語源解釈(394e-421c)が全体の議論の枠組みに内在的に理解される。最終的には、「要素的な名前」という概念を中心に、類似性に基づく語源解釈の意義が検討される。

第四章では、クラテュロスが考える「名前の正しさ」の意味論的問題が論じられる。クラテュロスは「すべての名前が正しくつけられている」と主張するが、それは、名前が記述的意味を介して対象の本性を表示するという趣旨であることが明らかにされる。だが、その主張では虚偽の言葉を発することが本性的に不可能となり、「虚偽不可能説」が帰結する。ソクラテスはその問題を回避するため、「記述的意味＝指示対象」説を「似像」と「写し」の区別を導入して論駁していく。そこでの‘σκληρότης’「硬さ」という語をめぐる議論が、本論文で中心的な役割を果たす。その語の検討をつうじてソクラテスはクラテュロスに「習慣」という発語行為と思考活動との習慣的な連関を認めさせるが、そこに含意される対象についての使用者の知識が言語共同体の中で問い直されることはない。他方で、ソクラテスは指示を確保する要因を「規約」と「類似性」の両方に求める。ここでは、名前を構成する字母と対象との間の音声的類似性が、指示をどう確保するかという言語哲学上の問題が検討される。

第五章は前章を受けて、クラテュロスの「名前の正しさ」に関する存在論的問題が論じられる。「すべての名前が、その記述的意味を介して、対象の本性を表示する」というクラ

テュロスの主張は、語の記述的意味が対象についての知識を獲得する唯一で最善の方法であるという「記述的意味＝知識説」に他ならず、そこには語の記述的意味が外的世界のあり方を前提するという存在論的問題がある。ソクラテスはこの説を実際のギリシア語の分析から退けようとするが、そこでの両者のかけひきが検討される。

第六章では、最終部に置かれる「流転をめぐる議論」に精密な検討が加えられる。先行研究の問題点やアプローチが検討され、『テアイテトス』等で主要なテーマとなる「流転説」がより広い文脈から精査される。「万物は常にあらゆる点で流転している」という極端な流転説のテシスからは4つの帰結が導出される。それを4段階の議論に整理して、それぞれを検討する。極端な流動説では、一つの名前がその記述的意味を介して一つの特定の対象（本性的指示対象）をもつことは不可能になる。その結果、クラテュロスの「名前の正しさ」と極端な流転説は本質的に両立不可能であり、もしクラテュロスが極端な流転説を擁護するのなら、彼は「名前の正しさ」を捨てざるを得ないことが判明する。以上で対話篇の全体像が完結する。

なお、本論文に独立の結論が設けられていないが、実質的に序論にその内容が含まれている。

審査の概要

本論文が扱う『クラテュロス』篇は、プラトン哲学において特異な位置をしめ、これまで十分な研究が施されてきたとは言えない。他方で、英米圏で本格的な研究書が近年公刊され、日本でもそれを受けた新たな研究が求められていた。田中君は博士論文に結実する一連の研究でそれらの最新研究を参照しながらこの対話篇を丁寧に読み解いてきたが、本論文ではそれらを統合する全体像の提示に成功している。これまで比較的軽視され、部分部分だけが取り上げられて論じられてきた『クラテュロス』について、全篇を統一的な筋から個別議論に即して読み解く試みは、古代哲学研究において重要な問題提起をなすものである。また、現代言語哲学と古代哲学との関わりにも関心を払い、哲学史研究の可能性を追求している。今後この著作を中心に、古代の言語哲学・認識論・存在論がもつ意義が改めて重要なテーマとなることが期待される。

本論文を評価するにあたり、[1] 対話の基本構図の再検討と対話篇的な読解、[2] 言語哲学としての意義、[3] プラトン哲学への新たな見方、という三点において、議論の有効性と独創性が論点となる。

[1] 著者がとりわけ重視した対話篇冒頭部の正しい読み方は、従来欧米圏の解釈で前提されてきた基本枠組みそのものを見直す可能性を提起している。この対話篇ではクラテュ

ロスとヘルモゲネスという二人の対話者がそれぞれ「言語本性主義」と「言語規約主義」という立場を代表し、それらの間でソクラテスが選択を行うという構図で理解されてきた。田中君はこの固定的な構図が20世紀後半から支配的になった状況を指摘し、その研究動向を反省することで、この構図に縛られない見方を提案する。その見方では、ヘルモゲネスが語る「言語」についての意見は、特定の思想立場（例えば、ソフィストらの社会規約主義）ではなく、常識的で素朴な言語観であると理解される。対話の議論を文脈に即して読み直すことで、従来の多くの解釈上の混乱や行き詰まりが、この筋において解消、ないしは整理されることが期待される。

この方針のもとでは、とりわけ、ソクラテスの立場を特定のものとせず、ヘルモゲネスに代表される私たちの常識的な立場と、クラテュロスの謎めいた立場とを解釈しながら一つの筋を描くという対話篇的な読解が示される。クラテュロスの立場も、ヘルモゲネスの場合と同様に最初から明瞭に据えられて検討されるのではなく、当初は謎めいた断片的な見方であった考えが、ソクラテスによって解釈され、批判的に吟味される間に、クラテュロス自身が考えを変えていく過程があるという。この新たな読み筋の設定により、プラトン自身の思索もより正しく位置づけられる可能性が高い。従来のように、ソクラテス（あるいはプラトン）の立場を「本性主義／規約主義」の二者択一で決定する無理な議論の必要はなくなるからである。田中君はむしろ、「規約」と「本性上の類似性」は両立し補完することを示唆している。この読み筋は一つの有力な提案として、今後当対話篇の解釈に重要な役割を果たすはずである。

他方、主要な議論で自分なりの筋を示すことには一定程度成功しているが、現在の既存の諸解釈や前提について、それらが誤っている、あるいは不適切であると示す議論が十分になされておらず、それらの維持や修正の余地は退けられてはいない。従来の見方を退けるのであれば、それらが孕む難点や矛盾の徹底的な批判が必要であるが、実際にはそこまで強い議論は与えられていない。その意味で本論文の議論は、別の可能な読み筋の提示という段階に留まっている。

論文審査会では、田中君がこだわった冒頭部の新しい読解の妥当性が、とりわけ焦点となった。いわば白紙から議論が始まるものと読もうとする冒頭部では、すでに何らかの立場が前提されており、そのように読む方が自然ではないかとの指摘が審査員からなされた。従来の研究者が「言語本性主義／言語規約主義」を過度に理論的かつ固定的に捉えてきたことの反省には一定の説得力があるが、その否定が即白紙から新しい議論が為されているという解釈を帰結するものではない。問題提起の意味は十分あるにしても、最終的に妥当な解釈にはさらに慎重な読解の積み重ねが必要であることが確認された。

[2] 本論文の第二の特徴である言語哲学としての意義については、肯定的な評価とともに

に問題点も提起された。これまで「語源分析」という議論が対話篇の中心にあると見なされており、疑似科学か遊びに過ぎないという低い位置づけしか与えられていなかった。著者はその見方を退け、この議論をプラトンの言語哲学の営みという文脈において適切に位置づけようとしている。この点では説得力があり、今後の展開可能性が評価された。

他方で、著者が遂行する言語哲学の議論に、いくつか基本的な問題点も指摘された。一つには、この古代哲学のテキストを解釈するにあたって援用している現代の言語哲学や知識論の概念や議論の使い方に混乱が見られるという点である。現代哲学で論じられている問題や構図を適用して解釈を加えようとする場面で時折、元の文脈から外れた意味を与えられている恐れがあること、論者や立場によって異なる概念や装置を適用することで、哲学議論の一貫性を損なっている可能性などが指摘された。実際、論旨が辿りにくい箇所もいくつかあり、現代の議論に結びつけようとした試みは必ずしも十分に成功してはいないとの印象を受ける。この点では、方法論的に再検討しながら、今後よりよい議論を構築することが望まれる。

[3] 最後に、『クラテュロス』篇を重要な哲学著作として読み解くという本論文の目標がどこまで達成されたかが、重要な評価点となる。すでに触れた「語源分析」の位置づけでは、個々の単語の語源探求とその是非が問題なのではなく、そういった方法をとる立場へのソクラテスからの批判的議論であるという読み筋が提案されている。つまり、語源を探り名前の内に反映した古代の命名者たちの見解を知ること、実在について知識を得たと思いついてしまう危険性が「無自覚」という形で暴かれる、それがプラトンによる存在探求の正しいあり方を逆に示すという読み筋である。この見方はソクラテス的な吟味という基本を考慮に入れることで、対話篇をより大きな問題文脈に位置づけることに成功している。他方で、そういった知識、言語の探求が、最終的にどのように展開されるのかという見通しは、『クラテュロス』の内部では十分に与えられず、やや中途半端な議論に終始するとの印象は拭えない。この点は、『テアイテトス』や『ソフィスト』といった後続する対話篇を、この読み筋で解釈できるかという今後の作業にかかっている。

また、論文審査会では、最後章で論じられた「流動説」をめぐる整理と議論が、研究のオリジナリティという点で高く評価された。「流動説」はプラトン哲学をどう理解するかにきわめて重要な要素であるが、これまでそれが論駁される『テアイテトス』第1部、及び『ティマイオス』の関連箇所だけが注目され、『クラテュロス』には必ずしも十分な検討が加えられてこなかった。本論文はクラテュロスという人物の考え方の変遷という想定のもとに、流動説がもつ理論としての含意が詳細に検討されてきており、従来混同されてきた諸タイプの区別という提案とともに重要な知見を与える。この点では本論文を基盤に、さらに流動説の内実の理解を深めることが期待されている。密接に関係する「イデア」とい

う根本問題は、「序論」で触れられてから論文のなかで時折顔を出す、結局明瞭な形で解釈は示されていない。この点も今後の課題とされた。

本論文は、近年の欧米の最新研究をおさえた上で独自の筋を対話篇の議論に即して辿ろうとしている点で高く評価される。他方で、個々の箇所解釈では Ademollo の注釈書 (2011 年刊) に過度に依拠しているようにも見え、少なからぬ議論が彼の問題提起や解釈の上で展開されているため、元の議論に問題がある場合に連動して必ずしも適切でない方向に進むこともある。最新研究の影響の大きさは理解できるが、もう少し距離を置いて、独自の考察を展開して欲しい場面が見られた。

論文の形式上の問題も指摘された。結論部が独立に設けられていない点については、哲学論文ではそのような形式も可能であるとの斟酌が示されたが、参考文献表に誤記や表記不統一が散見された点については、事前チェックの甘さに他ならず、研究論文として今後強い反省が求められた。

以上のように、論文審査会ではいくつかの問題点が指摘され、批判的な議論が交わされたが、これは本論文が到達した基本的な学術価値を損なうものではなく、今後さらに議論の説得力を高め、適切な議論を行う方向を示すものであった。審査会で指摘された諸点は、目下の課題を明瞭に自覚するための示唆となったはずである。全体として、最先端の研究を消化しながらそれを自分の理解に鍛え上げた努力は高く評価された。研究の層が厚いプラトン哲学の中でも研究手薄な『クラテュロス』篇の意義と可能性が、本論文をきっかけに日本でよりつよく認識されることは確かである。丁寧な対話篇の読解から哲学的な問題に迫る田中君の論文は、この主題をめぐって現在では日本語で唯一の本格的な研究成果となっている。審査員一同は、本論文が古代哲学の研究論文として、高い学術的価値を有しており、博士 (哲学) の学位に相応しいと判断する。